

公開講演会記録

桜美林大学の創設者・清水安三と中国

——大正デモクラシー期の中国論の検証

北海道大学名誉教授 高井潔司



清水安三との出会い

2024年11月、『民族自決と非戦——大正デモクラシー中国論の命運』という本を出版したところ、矢吹晋先生から国際善隣協会で講演してはという提案があり、十数年ぶりに来ました。

この間、桜美林大学でジャーナリズム担当の教員を務め、中国論からも離れていました。本の帯には「侮蔑的対中姿勢」を捨て、真の相互理解・協調へ」と書いてありますが、これは編集者が作ったもので、私の執筆動機は、桜美林大学に着任し、本の表紙になっている桜

美林大学の創設者、清水安三が大正期から敗戦までに書いた数多くの中国に関する評論に接し、そのユニークで優れた中国論がどのようにして生まれたのか、という驚きから出発しました。

私は新学期直前にドタキャンした人の後任となったため、桜美林大学がどういう経緯で誕生したのか、創立者の清水安三がどういう人物なのか、ほとんど知らなかった。

着任1日目に開かれた新規採用者の研修会で創設者の清水安三の自伝的評論集『石ころの生涯』を渡された。目次をパラパラとめくって驚いた。第一部

わが生い立ち、第二部 崇貞学園物語に続き、第三部は中国論とあった。そこには25本の評論が掲載されていて、その論調は、当時日本では排日運動と非難されていた五四運動を高く評価し、日本の軍国主義を批判するなどの確に中国の当時の状況を照らし出す内容だった。

私が読売新聞の元北京特派員であることを知ってか、翌日から同僚の先生たちが、こんな資料がある、清水安三に関してこんな本を書いたと、研究室に持ってきてくれた。そのうちの一冊が『清水安三先生遺文集(二) 日本のが中国政策を激烈批判——ジャーナリス

ト活動（1919（27））である。この時期の150本近い中国に関する清水の評論が掲載されていた。この本では2度目の衝撃を受けた。読売新聞に、1921（大正10）年の12月から23（大正12）年5月の1年半のうちに37本の清水の記事が掲載されていた。北京から投稿したものだ。しかも1923年5月以降、それがぶつ切り切れている。私はこの事実を全く知らなかった。そこから私の研究が始まった。

大正デモクラシー中国論とは？

清水の記事の背景や同時代の中国論との比較を検討する中で、吉野作造や石橋湛山、また大阪朝日新聞の社説などが一つのグループ、潮流として浮かび上がってきた。私はそれを「大正デモクラシー中国論」と命名した。彼らの中国論は、中国の立場にも立って日中関係を見ろという特徴があり、そして中国の民族自決の運動を支持し、日本の軍国主義を戒める、つまり非戦を訴える。この本のタイトルである「民族自決と非戦」につながっている。

この本では明治期の大隈重信、福沢諭吉、内村鑑三に始まって大正期・昭和期の吉野作造、石橋湛山、橋樸、尾崎秀実など様々な人物の中国論とその足跡を描いた。戦後、1960年代から70年代、アジア・アフリカ諸国との連帯が強く叫ばれる中、戦前の中国論、アジア論に対する研究がかなり進んだ。だがマルクス主義歴史家の間では、大正デモクラシーに批判的で、とくに対外論は「内にあつてはデモクラシー、外にあつては帝国主義」と否定されてきた。その結果、これらの人々の中国論は低く評価され、一部の研究者を除いて、忘れ去られることになった。

だが、大正期の政治、外交は必ずしも大正デモクラシーが主流であったわけではない。むしろ藩閥政治、軍閥政治が主流であり、とくに外交は軍閥による帝国主義の志向が強く、大衆世論もそれを支持していた。大正デモクラシーを提唱した人々は決して帝国主義を主張していない。むしろ戒める立場に立っていた。私の本では、今一度こうした人々の中国論を読み直し、評価

の見直しを行った。

本日は清水安三を中心に話します。

清水の生涯を決定付けた来日宣教師

まず彼の生い立ちや中国派遣の経緯から。彼は1891年滋賀県高島郡の豪農の三男として生まれた。長兄の放蕩によって家は没落し、旧制膳所中学校時代は、兄の妾が経営する旅館兼料理屋から通学し、勉学に身が入る環境ではなかったと述懐している。救いは英語教師として赴任してきた宣教師でもあるウィリアム・メレル・ヴォーリズだった。ヴォーリズは、メンソレータムの近江兄弟社の設立者でもあり、お茶の水の山の上ホテルなどの設計者としても知られる。彼の影響から洗礼を受け、大学も同志社大学の神学部に進学した。

当時、日清戦争の勝利などもあって、様々な日本人が中国に渡った。大陸雄飛、一旗組、公安警察に追われての逃亡、中国の革命支援……など多様な思惑があった。

清水は大学時代、徳富蘇峰の「我国

の宗教家に、支那伝道に一生捧げる者ありや」という文章に、それなら自分がと決意を固め、義和団事件の犠牲者ペトキン牧師の「自分が亡くなっても、息子を育て、また中国に派遣してほしい」との母校エール大学にあてた遺言に感動し、組合教会の中国派遣募集に手を挙げた。やはりヴォーリスの影響が一番大きいと言えるだろう。

中国で宣教師のかたわら評論活動を開始

清水は1917年に奉天（現在の瀋陽）に赴任、1年半滞在するが、1919年に北京に移った。この頃、彼は『我等』という日本の雑誌に評論を投稿し始める。第一作は1919年5月号に掲載された「支那生活の批判」である。この評論はこう始まる。

「支那は傲慢なヨーロッパ人のように、未開の野蛮人ではない。……支那人は気早な日本人の批判するやうに、過去の文明人ではない。或は過去の国民であるかも知れぬが、決して過去の人間ではない。彼等には現代文明

よりか先を越した思い切った若々しさがある」

だが、中国の現状は厳しい混乱の状況にあることは清水も否めない。しかし、この点を清水は「支那は土の海原である」「支那は一夜造りではない。五千年の歴史が纏い付てゐる」とし、「この『広さ』の為に支那は、大男知恵が総身に廻り兼ねている所があり、『長さ』の為に伝統因習の悩みがある」と中国が直面する悩みを中国社会の基本的な構造から描き出している。

日本では中国人の民族性について、天下、国家を考えず、利己主義で、砂粒のように団結心もないと見る声が圧倒的だった。この点について、清水は「支那は少数の『馬鹿な論客』と『伶俐な民衆』の多数から成立っている」と、異なった見方をしている。

「馬鹿な論客」は泥棒を前にして親子が口論しているという。「馬鹿な論客」は「政治家」、「泥棒」は「侵略者」、「親子が口論」は「内部抗争」と置き換えるとよくわかる。清水は、日本の中国通の「支那人は利己一天張り」との

指摘を批判し、「支那人は日本人などよりか、幾層か親切で正直で利他である。彼等は只国家と統一者とに対して利己であるのだ」と分析する。なかなか面白い人間観察であり、中国の将来性を高く評価することとつながる。

五四運動の波を体験

北京に移住した清水は、その年に中国の革新運動である五四運動を目撃する。日本国内では「反日運動」「排日運動」と見られていた。だが清水はリーダーたちとの交流を通し民衆運動の実態を肯定的に理解した。

「支那において群衆運動が、ああまで成功しようとは、誰しも思っていたらなかった」「日本の軍閥の連中は、猶も支那官憲の威嚇に信頼して排日運動を制止しようと考えへてゐる」「しかし番頭や巡査兵士連中に、排日感情が胸いっぱいである限り、どうすることもできない」「排日者をすべて収容するには、四億の国民を幽閉するだけの留置場または牢獄が必要になるかもしれぬ」「デモンストレーションを一度でも見たものは、民

衆の力を今さらのように感じるであろう」
「今にして日本人が考え直さねば、日本人は世界の人間から仲間はずれになるに相違ない。孤立の国家が亡ぶか亡びぬかは、具眼者が一寸考えれば解ることである」（『基督教世界』）。

清水の中国論を支えた大阪朝日新聞人脈

この『我等』という雑誌は、「白虹事件」で大阪朝日新聞から退社に追い込まれた長谷川如是閑らによって創刊された。「白虹事件」は富山の米騒動に端を発した反軍閥政治運動の中で、「白虹日」を貫けり」という内乱を予知する故事成語を使って報じた大阪朝日新聞を、政府が弾圧した事件。執筆者、編集人が処罰を受けただけでなく、社長は右翼のテロに遭い、編集幹部は一斉に退社に追い込まれた。日本の新聞紙上で最も激しい弾圧事件の一つと言われる。長谷川は後述する吉野作造と並んで大正デモクラシーの旗手として知られる人物だ。清水安三が中国赴任にあたり組合教会の幹部と大阪朝日新

聞にあいさつに行く。そのとき対応したのが社会部に所属していた長谷川如是閑で、中国赴任の抱負を簡単に紙面で紹介してくれた。そんな縁から『我等』に投稿したのである。

第一作の投稿が採用され、原稿料も届き、気をよくした清水は毎月のように投稿した。翌1920年には4本の評論が掲載されている。こうした評論が注目され、「今度は読売新聞の編集長の丸山侃堂氏かんどうから、『支那当代新人物』と題して、二三十回に亘って連載の文章を書けという注文が来た。そこで私は陳独秀、胡適、魯迅、周作人等を紹介することにした」と回想する。

短期で終わった読売新聞での活躍

丸山は長谷川同様、白虹事件で大阪朝日を追われ、読売新聞の政経部長となっていた。執筆の舞台は読売だが、こでも大阪朝日新聞人脈が生きていた。読売新聞はこの時期、発行部数が数万部に落ち込んでいた。同じく白虹事件で東京朝日新聞の編集局長を辞した松山忠二郎を社長に迎え、再建に乗り

出していた。松山は再建に当たって国際報道を重視した。『讀賣新聞八十年史』によると、「松山が讀賣の経営に乗出すや非常な意気込みで他の一流紙——朝日新聞を仮想敵とみなし、特に政治、経済、外交記事に主力を注いだ。その頃は対独講和条約が調印されて間もなく、わが国内の経済産業などはこの平和条約による世界改造の転機に立つ重大時期で、新聞も国際問題が重要な地位を占めていた」と当時の読売の状況を伝えている。

清水の原稿が大量に掲載されたのもうなずける。その活躍も1年半で終わった。読売は再建策が功を奏し、発行部数が10万部を超え、新社屋の建設を進めていた。その落成式の当日、関東大地震が発生した。新社屋は焼失し、再建不能に陥った。その読売を買収したのが、元警察官僚の正力松太郎だった。丸山侃堂ら改革派の幹部は反発し、一斉に退社した。当然清水は読売新聞での執筆の機会を失う。ちなみに侃堂は、戦後民主主義を牽引した丸山眞男東京大学教授の父親だ。

活動の場を『北京週報』に移す

『北京週報』は北京在住の日本人が主宰し、日本語で書かれた中国問題専門雑誌。戦後の中国政府宣伝誌とは全く別物だ。発行地北京を中心に部数は数千部。魯迅や李大釗（中国共産党の創設メンバー）、胡適、周作人ら当時の中国の新たな思想、文化を推進した気鋭の知識人たちも寄稿。一時期は日本国内にも郵送され発行部数は1万を超えたという。

清水は1924年から毎週のように、「女性解放運動」や「孫文の思想と人物」など中国の新しい動きを紹介し、「治外法権・租界を放棄せよ」「中国は赤化するか」といった過激な評論を書いている。それらの評論、研究をまとめて2冊の本を日本で刊行した。

吉野作造も激賞した清水の中国論

『支那当代新人物』と『支那新人と黎明運動』の2冊の中国研究書で、2冊の本の序文を書いたのが、大正デモクラシーのもう一人の旗手、吉野作造

だ。他人の書いたものに序文など書かないという吉野だが、安三の著作だけに書いた理由をこう記す。

「第一に清水君の本は非常にいい本だ。清水君は支那の事物に対して極めて公平な見識をもっている。今日は親友の交わりを為しているが、予が氏を識るに至ったのは、実は大正九年の春同氏が某新聞に寄せた論文に感激してわれから教を乞ふたのに始る。爾来同氏はいろ／＼の雑誌新聞に意見を公にされて居るが、一として吾人を啓蒙せぬものはない」

「第二に清水君の論説する所は悉く種を第一の源泉から汲んでいる。書いたものによって其人の思想を説くのではない。直接に氏の書中に描かれた人々と長年親しく付き合っているのである」

「第三に同君の本書に論じている題目は同君にとって他人の仕事ではない。我が仕事同様の同情と興味を以て取扱っている」

「第四に清水君はまたその好む所に偏していい加減な事をいう人ではない。悪いことは悪いと憚りなくいう丈の勇

気と聡明とをもっている。この点において同君の書いたものはあてになる」

吉野が序文でいう「第一級の源泉」とは、すでに紹介した魯迅や李大釗らを指す。清水はしばしばこうした人物を自宅に訪ね歓談し、それをもとに記事を書いた。

吉野作造が北京大学教授の李大釗と連絡し、日中の学生交流を進めようとしたとき、清水がその仲介役を務めた。ここでも大正デモクラシー人脈が機能している。

共に戦う丸山昏迷

吉野から絶賛された清水の取材のスタイルだが、清水の独創というより、同僚の丸山昏迷から学ぶところが大きかった。二人は協力しながら、競うように中国の革新リーダーに食い込んでいった。清水が戦後書いた「回憶魯迅」という文章の中で「北京の思想家や文士達に最初に近付いた者は実に丸山昏迷君であって、多くの日本からの来遊の思想家や文士達を、或は周作人さん、或は李大釗先生の家々に案内した者は

丸山昏迷君であった」と記している。

丸山昏迷という記者も非常に興味深い謎多き人物だ。清水より3歳年下。1895年長野県の旧北安曇郡八坂村（現大町市）の農家に生まれ、本名は幸一郎。彼も読売新聞に投稿したり、北京の風土、名所、慣習などを紹介する本を出版した。30歳という若さで早逝したこともあり、その経歴はほとんど不明だった。しかし、戦後、1980年代、数人の研究者によって彼が地元の本屋の店員をし苦学の末、上京し、中央大学夜間部に入學したが、大杉栄などと関係を持ったことで、日本を追われ、大陸に逃れたことが明らかにされた。同じ村の出身で『北京週報』を創刊した藤原鎌兄を頼り、同誌の記者となった。中国の左翼運動の活動家とも接触し、李大釗と一緒に1920年、北京から日本社会主義同盟に加入している。中国共産党の創設前のことだ。

大正デモクラシーを反映した

『北京週報』

1970年代のアジア経済研究所の

研究プロジェクトの一環で『北京週報』を分析した小島麗逸は「経営的に日本権力、中国政府から自立していた『北京週報』は二つの面をもっていた。藤原に代表される顔と清水、丸山に代表される顔である。後者は、文学・思想面に限られたが、伊藤氏と通ずるものがあつた」と述べている。伊藤氏とは中国研究で当時トップレベルにあつた満鉄の調査部の責任者、伊藤武雄のこと。社会科学の基礎を学び、満鉄の下、調査研究にあつた伊藤らと比べれば、清水たちは研究というより評論にすぎない。だが、改革のリーダーたちと直交流し、中国の新たな胎動を実感し、評論を書いた。

一方、藤原は中国革命の胎動を全く評価していない。アジアの盟主たる日本の指導によって中国を救済し、欧米の支配からの脱却を図ろうというアジア主義者だった。五四運動の翌年に書いた文章では、「昨日支那側の有力者と会せるに今日は所謂国恥記念日である」と云う。余の曰く彼の如きあんな日支協約（対華21か条要求）にして国恥と云

うならば、支那の国恥記念日は更に山の如く設けなければならぬ。（中略）余輩をして忌憚なく謂わしむれば支那の国恥は、（中略）支那の現状其ものが世界に於る大国恥ではないか。全世界が新しき時代に入るべく改造の努力を尽しつつある時、（中略）南北の内輪喧嘩から始まって今では南々北々支離滅裂となつて私利と私欲とを是れ競つて居る」と述べ、清水らとは全く異なつた評価をしている。

しかし、藤原は一方では大正デモクラシーの申し子でもある。『北京週報』は日本政府や中国の各方面から支援も干渉も受けない「公平、自由、正確」をモットーに刊行された。政治的な立場や主張の異なる清水や丸山も採用して、多様な言論を保障した」と小島はいう。

『北京週報』の停刊

リベラルな二人の記者を抱え、とりわけ共産主義者の疑いのある丸山には常に北京駐在の憲兵隊が眼を光らせ、1930年に停刊に追い込まれた。戦後、藤原と妻のつたが出した2冊の回

想録によると、「陸軍中佐、佐々木到一氏の『南方革命勢力の実相と其の批判』の書を我が社にて発行し、その新刊書は日本警察署を経て納本すべき規則を私は（経営の担当）知らず、納本せぬまま、一般に売り出してしまった。又其前に社の清水安三氏が南方へ革命視察して記事を『北京週報』へ連載したりで、我社は日本軍部の反感を買っていた」とその経緯を明かしている。

清水は停刊になる『北京週報』に最後の原稿として「国際精神と社会精神」というエッセーを書いている。

「私は過去十年の間、北京においていつも、身を左端に置き、常に叫び続けて来たのである。ある時は国賊視され、ある時は過激派と罵られもし、馬鹿といわれ狂人と扱われた」

「私が国賊視されたる理由はどこにあるか。非国民として罵られたる理由はどこにあるか。それはいうまでもない。私に一つの国際精神があるからである。私は日本民族を愛する心は十分にある。けれども同時に、隣国支那の憂いを、わが憂いと為すだけの心持ち

を持っている」

「時折り凄まじい議論をなし、出兵に反対し、祖国を攻撃しても、それはいささか支那人の排日感情を緩和するとも、けっして悪い結果をもたらすものではあるまい」

軍部の圧力が高まる中、清水は『北京週報』という言論の場も失った。

宣教師としての仕事

この間、本業の宣教師の仕事はどうなっていたのか。北京に移った1919年は、華北地域は未曾有の飢饉に襲われ、清水は日本国内に救援募金を呼びかけ、児童を救出するための収容所を設置した。翌年まで約800人の児童を救援した。その延長上に1921年北京周辺の若い女性たちを支援するための崇貞工読女学校（のちの崇貞学園）を設立した。貧困から売春婦に身を落としかねない女子が仕事と読み書きを学ぶ場として設置された。それが現在の桜美林大学を中心とする桜美林学園の前身となる。日本の組合教会からの送金はこの学校経営につき込み、評論活

動は自身の生活費を稼ぐためだった。

ただ清水自身は派遣地の事情を調査し、報告することも宣教師の仕事であると考えていた。19世紀以降、欧米の宣教師は布教だけでなく、欧米の科学技術や文化を翻訳して中国に紹介し、また中国事情を調査し出版して広く世界に知らせるという活動を行っている。清水はこうした事情をよく自覚していた。

大正デモクラシーと軍部

清水らの中国論の背景となる大正デモクラシーは、普通選挙の実施と政党政治の展開、ワシントン会議などを通じた軍縮の実施、そして社会的には大正モダンと呼ばれる自由で頹廃的なムードに包まれた。この風潮は直接的にも間接的にも軍部や右翼を刺激した。軍縮は軍の権益を侵し、政党政治は軍と密接な関係にある藩閥政治の否定である。大正モダンは都市部に限られ、兵士の出身母体である農村部は困窮の最中にあった。

軍や右翼の対抗策は、政府要人、財界人へのテロや反乱だったが、最も組

組織的な行動は満州事変の断行だった。それは総動員体制の確立、日中戦争、太平洋戦争への流れとなる。軍国主義の、清水をはじめ、私が「大正デモクラシー中国論」者と名付けた人々および新聞は、それぞれに様々な運命をたどることになる。吉野は満州事変を侵略だと断じたが、間もなく不遇のうちに亡くなる。大阪朝日新聞は軍国主義を煽る新聞へと変節した。石橋湛山は表現を工夫しながら、抵抗を続けた。

中国に身を捧げた妻の死と才女との再婚

評論執筆の場を失った清水は、崇貞学園の経営を妻や在留邦人にゆだね、日本に出稼ぎに出る。キリスト系の雑誌の編集者や同志社大学の講師などを務め、数年間、学園維持のため送金を続けた。この窮状を救ったのは、恩師ヴォーリズの設立した近江兄弟社で、清水は同社のメンソレータムを販売する北京駐在員の職を得て、再び大陸を舞台に仕事することになる。しかし、もう一つのより大きな不幸に見舞われ

る。それは妻の美穂を38歳の若さで喪ったことだ。美穂とは大陸に渡った直後の1918年に結婚、二人で児童收容所や崇貞学園を運営してきた。安三には、12歳の長男、10歳の長女、8歳の二男が残された。

読売新聞が正力時代に入って、紙上からすっかり名前の消えた清水安三だが、データベースで検索してみると、1935年6月5日の紙面にひょっこりその名前が登場する。

「四十三の花嫁 小泉女史が『青春よサラバ』という見出しの記事だ。「人はやっぱし一生に一度結婚という花をかざさねばいけないものか。独身で有名な青山学院専門部教授「女子教育運動」のマスターオヴアーツ小泉郁子女史の四十三年の独身生活がポロリ砕けて支那は北平にいる清水安三（43）」という人と結婚するのである」と書き出し、写真入りで小泉女史の結婚を祝う才女たちの祝賀パーティを報じている。清水の再婚相手はそれほどの著名人だった。

この結婚、清水が北京から書いた求婚の手紙によって実現した。実は、小

泉郁子とはアメリカのオーバーリン大学のクラスメートだった。清水は1924年、北京からアメリカに3年間、留学していた。留学の前年、倉敷紡績の大原孫三郎社長が北京を訪問した際、清水がガイド役を務め、観光名所ではなく、庶民生活の実情視察や五四運動のリーダーたちとの面会、自身の設立した学校訪問などを設定して、大原社長が感動し2年間の留学の費用を提供した。

なぜ新聞記事になるほどの才女が、3人の子持ちの北京在住の貧乏宣教師と結婚に踏み切ったのか。小泉郁子はミシガン大学で教育学の修士号を取り、帰国後青山学院女子専門部の教授に就いた教育学の専門家であり女性運動家でもあった。自身で学校経営を実践したいという思いが強かった。

北京の聖者に祭り上げられる

この間、満州事変から日中戦争へと戦火は拡大。日本が国際社会から孤立する中、日本外務省は清水夫妻の学校運営に目を付け、中国人、朝鮮人を救済する安三の活動を紹介する英語版の

『愛の建設者』を出版し、対外宣伝に利用した。総動員体制の下で、大陸文化工作者に仕立てられ、日本の新聞、雑誌上では「北京の聖者」と祭り上げられた。北京在住の中国通として、日中戦争勃発の1937年には中央公論に4回にわたって投稿している。

厳しい言論統制の中、かつてのような激しい軍国主義批判はないが、それでも慎重な言い回しで日本の対中国姿勢を戒める発言が随所に見られる。例えば「その後の蒋介石」（『中央公論』1937年4月号）という論考では、西安事件の意義について、「どんな意味において、画期的事変であったかというに、それはいうまでもなく民国支那が、内争時代を完了して、実に統一時代に入ったという意味においてである……そのことが直ちに『容共』とまで進展するかどうかは今後の問題であるが、もうお互いに内争は止そうということになった」と述べ、とかく分裂状態といわれる中国が統一戦線で日本に向かってくることを予測している。

ハワイでしかした舌禍事件

学校の経営のため、安三は寄付金集めに奔走した。安三は1939年末から約半年、ハワイ、アメリカ、カナダを回って各地で講演会などを開き、寄付金を募った。とくにハワイでは、その席上、南京虐殺事件が本当にあったのか、どうかとの質問を受け、安三は事件の存在を否定しなかったことで、物議をかもした。日本総領事館から即帰国を命じられたが、その後もアメリカ、カナダ行脚を強行した。その結果、北京に戻ると1か月にわたり憲兵隊の取り調べを受けた。最終的に集めた寄付金17万円のうち10万円を軍に収め、事件はうやむやになった。

憲兵隊は日頃から安三の言動を監視していたし、北京の教育局の日本人顧問はクリスチャンの経営する学校を閉鎖させようと画策していた。しかし、「北京の聖者」と祭り上げられ、天皇から下賜金を受けた安三をそうやすやすと罰するわけにもいかなかった。

こうした経緯もあって、研究者の中

には、安三を日和見主義者と批判する人もいる。学校の存続のために妥協したところもある安三だが、最後まで国際人として軍部の暴走に抵抗した。

戦後は桜美林学園の創設に専心

敗戦後、安三は北京の学園の全てを中国当局に接収され、着の身着のまま帰国、一から現在の桜美林学園を築いた。北京時代同様、寄付金を募るため、国内外を歩いた。ジャーナリストとしての活動は行わず、北京時代の業績は一部の関係者、研究者を除き、忘れ去られることとなった。

(2025年3月21日・公開講演会)

筆者略歴(たかい・きよし)

神戸市生。1972年東京外国語大学卒業。読売新聞社入社、上海および北京特派員、論説委員を歴任。1999年北海道大学教授、2000年同大学院教授。2012年桜美林大学教授、2019年退職。主な著書に『甦る自由都市上海』『中国報道の読み方』『民族自決と非戦』。